国立大学法人
長崎大学
NAGASAKI UNIVERSITY

特集 新学長が語る

長崎大学の挑戦

President Interview

2017年10月1日より、長崎大学は新しく河野茂学長を迎えての体制がスタートしました。そこで今号の特集では、河野学長にこれからの長崎大学について、たっぷり語っていただきます。聞き手は長崎経済研究所の小川洋さんです。行政、産業界と長崎大学をとり結ぶ都市経営戦略推進会議のメンバーである小川さんは、大学の地域貢献についてもその重要性を強く訴えておられます。地域の中にあって長崎大学はどうあるべきか。どのような学生を育み、日本や世界に挑戦していこうとしているのか。深く濃い巻頭インタビューです。

Challenge
of Nagasaki University

CONTENTS

特集	新学長が語る長崎大学の挑戦	1
環境科学部	座談会「地域の先に世界がある」	9
大学の知	外国人患者へ先進医療を提供し 海外へ高度医療を輸出 長崎大学病院 国際医療センター	13
卒業生に聞く	川久保晶博さん	15
グラバー図譜	コバンザメ	17
贈る言葉	グローバル化時代における 長崎大学の意味	19
Information	大学院設置情報・クイズ・プレゼント	21

若い人がチャレンジできる大学へ

小川／河野茂学長、まずは長崎大学学長ご就任おめでとうございます。

学長／ありがとうございます。長崎大学の学長という重責を引き受けるにあたり、身の引き締まる思いですが、萎縮することなく心新たに挑戦したいと思います。

小川／河野新学長がこれからどのような長崎大学を目指していかれるのか、受験生はもちろん、長崎県内外の経済人や行政、卒業生など、多くの方々が大いに注目していることと思います。本日はよろしくお願いいたします。

さて、まずこの『チョーホー』の主な読者である高校生に対して、学長の思いをお聞かせください。

学長／一言でいうと、若者には、長崎大学という場でどんどんチャレンジしてほしい、私たちはその環境を整えることに全力で臨むので安心して飛び込んできてほしい、ということです。そして、長崎に来られる国内外のさまざまな人と出会い、世界的な幅広い視野を身に付けてほしいですね。

私自身も長崎大学医学部の出身で、今年はちょうど創立百六十周年に当たります。百六十年前の一八五七年十一月十二日、オランダ人医師であるポンペ・ファン・メーデルフォールト先生が医学伝習所で近代西洋医学の教鞭を執りました。長崎大学医学部はこの日を開学の日としています。実はこのとき、ポンペ先生はたった一人で十二人の若き日本人医学生を相手に、物理学、化学、系統解剖学、生理学、病理学、調剤学、内科学、外科学といった膨大な量の学問を教えていたのです。それはやがて全国に伝わり、近代医学の基盤となっていきました。当時、先生は何歳だったと思いますか？なんと二十八歳なんですよ。

小川／え！ずいぶんお若いですね。

学長／齢二十八で大変な功績を残したことになります。ものすごい情熱とエネルギーですね。

私を含め、本学の教職員は、今もこのポンペ先生の志の高さとともに、若い世代の可能性や潜在能力の高さを常に意識し、理解しながら、学生と共に歩んできました。これは本学の個性の一つといえます。例えば、一九六〇年代にはすでに医学部の若き研究者がアフリカの各地で医療支援活動を始めています。以来、長年にわたり実績を重ねながらケニアに拠点を築き、国際保健医療において大きな存在になっています。また、東日本大震災の際も、片峰前学長自らが旗振り役となり、民間の船としてはどこより早く被災地に赴いて、大量の救援物資を届けました。その後、多くの長大生が率先してボランティアに赴き、今も復興支援を継続しています。日常的にも学生の自主企画を公募して実現をサポートする「夢への架橋」プロジェクトが定着しています。少々無謀でもチャレンジしてアクションを起こすことを歓迎する気風がキャンパスに根付いているのです。

一般に、今の若い人たちについてはメディアから「ゆとり世代」、「さとり世代」と決めつけられがちですが、そんな言葉にとらわれず、のびのびとした大学生活を送りながら、さまざまなことに勇気を持ってチャレンジしてほしい。私たちはその思いをがっちり受け止めます。

小川／学長は、学長選の際にも、日本の未来を担う人材の資質に欠かせないのは「勇気ある挑戦」であると強調されていました。非常にとがった言葉だなと感銘しています。

ポンペ・ファン・メーデルフォールト
J.L.C.Pompe van Meerdervoort(1829～1908)
(長崎大学附属図書館所蔵　ボードインコレクション)

未来の人材の資質に欠かせないのは「勇気ある挑戦」

株式会社長崎経済研究所
代表取締役社長
小川　洋
おがわひろし
1978年慶応義塾大学商学部卒業後、十八銀行入社。桜町支店長、大村支店長、佐世保支店長を経て2010年、取締役常務執行役を務める。2016年退任し、長崎経済研究所代表取締役社長に就任。

Hiroshi OGAWA

学長／今、世の中のニーズは常に変化しています。若い人にとっても「これを勉強しておけば万事OK」というオーソドックスな学びではなく「挑戦する勉強」を意識していただきたい。その第一歩は、「自分はいったい何をしたいのか」、「どういったことで世の中の役に立ちたいのか」を早めに意識することが大切です。

これからの日本の未来は、日本だけの固定された視点で語ることはできません。そのためには、基礎となる学力と体力を土台として、未知の分野や見知らぬ人の間に飛び込む勇気が必要です。飛び込んだ後は、失敗を繰り返しながらでも、自分の夢や目標に向かって情熱を注ぐ。課題を発見して自分で考え、解決策を見いだす。そのような未知の領域に挑戦する熱意と根気、困難に立ち向かう勇気と積極性といった資質は、学生のうちに社会との関わりの中で身に付けて磨いていくことができると考えています。

志の高い学生を育む教育

小川／学長は四つの基本方針をお持ちだと聞きました。その内容についてお教えください。

学長／大学が持つ重要な役割ごとに基本方針を掲げました。まず、教育については「社会に貢献する志の高い学生を育む教育」です。研究については「ヒトの幸福と平和を希求し、科学を用いて世界に資する研究」。地域貢献については「長崎の未来を創る大学」。そして最後に、働く場所としての大学を「教職員の多様性とやる気を生かす大学」とした四本柱です。

小川／高校生が入学したい大学、地域が期待する大学、教職員が「ここで働いていきたい」と思うような大学。その解決策が四つの基本方針に含まれているということですね。

学長／教育方針から順にご説明していきましょう。これまでの三期九年間の任期をまっとうされた片峰茂前学長は「モジュール」[※1]という大胆な仕組みを導入し、教養教育の改革にあたりました。加えて、本学の長年の夢であった人文社会系学部「多文化社会学部」を新たに立ち上げました。その後を引き継ぐ私の役割は、学部専門教育への取り組みであると考えます。長崎大学の卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）という三つのポリシーに基づいた教育の体系的な実施と評価を積極的に進め、教養教育から専門教育への流れを整理します。

特に大学院教育においては、グローバルに通用する教育課程の編成が急務です。問題を解決するためには、チームとしての総合力が優れていなければ柔軟に対応できません。本学には、多文化、教育、経済、医学、歯学、薬学、工学、環境科学、水産の九学部がそろっており、熱帯医学研究所や原爆後障害医療研究所といった専門に特化した研究所もあります。来年度はそれに加えて、人文社会科学系の大学院も新たに誕生する予定です。この特徴を生かして学部や部局を横断した教育の充実化を

※1／モジュール：ひとまとまりの科目群。長崎大学では、現代社会が直面しているテーマを柱にしながら、いくつかのモジュールを構成しており、学生が選択できるシステムとなっています。

Challenge of Nagasaki University

図ります。

小川／確かに、人文社会科学と自然科学の双方がそろった総合大学の強みを意識することは大きな鍵といえますね。具体的にはどのような取り組みが考えられますか。

学長／例えば、医療技術の開発にあたる医学部と工学部、また医療経済には医学部と経済学部、子どもの心に関しては教育学部と医学部といった学部同士の連携です。未来の海洋エネルギーについては水産分野と工学分野が連携した新しいプロジェクトも立ち上がりました。

　このような多様性が本学の財産といえます。異分野の融合には、教員が一緒に働ける場をつくる、緩やかで柔軟な仕組みがいいでしょう。学生はそれぞれの学部で学びながら自身の研究テーマや将来の働き方を模索するわけですが、その過程の中で関心を持った異分野にも積極的にアプローチしていける部局横断的な環境が整備されていれば、その後の動き方もまったく違ってきます。そのために部局同士の情報共有を推進しながら、学生にとって風通しのいいプラットフォームを形成していきます。

小川／なるほど。すると学生は、個々の専門性を持ったさまざまな先生に接しやすくなるというメリットがありますね。今の学生の一番の関心事といえる最終的な出口、つまり就職活動の選択肢も広がる可能性があります。受け入れ先である企業にとっても、専門性に特化した学生だけでなく、異分野への広い視野と関心を持つ学生は、人材として非常に魅力的です。

学長／先ほど「挑戦する勉強」という言葉を使いましたが、異分野への広い視野はこのような環境でこそ育まれると思います。もちろん、学生の就職活動におけるサポートも最も重要な課題です。高校生も保護者の皆さまも、最も気になるところでしょう。私は、学長自ら出口対策の旗振りをするくらいの気概を持っていますよ。景気の良し悪しに関係なく、「長崎大学の学生はユニークで優秀だから、もっと採用したい」と多くの企業から求められるようにしたいですね。それには、やはり、社会で通用する資格の修得を促進したいと思います。

水産分野と工学分野が連携した未来の海洋エネルギー開発

長崎の海を舞台に現在進行中なのが、洋上風力や潮力、波力といった再生可能エネルギーを基盤とした海洋技術クラスターを構築する壮大な計画です。長崎県や多くの企業からなる協議会に加え、長崎大学の工学部や水産学部の研究者が研究や人材育成に貢献しています。

小川／それは頼もしい。採用した企業から求められるようにしたいですね。それには、やはり、社会で通用する資格の修得を促進したいと思います。

学長／逆に入口、つまり入学試験ですが、現在は改革の機運が高まっており、私たちも他大学に先駆けて長崎大学にふさわしい学生に入学してもらうためのシステム作りを行っています。

小川／それは受験生にとって一番知りたいことでしょうし、不安の種でもあります。

学長／受験生の皆さんが不利にならないよう、安心して入試に臨める体制を整えて周知していきます。特に、高校の進路指導の先生や保護者への情報提供を迅速に進めます。

長崎だからこそできる研究

学長／大学の大きな役割である研究についての基本方針は「ヒトの幸福と平和を希求し、科学を用いて世界に資する研究」です。最高学府で研究される科学が、ヒトに幸福をもたらさなければ、何のためにあるというのでしょうか。日本で唯一被ばくを経験している医科大学を前身とする医学部や薬学部を持つ本学は、それを最も深く理解している大学であると自負しています。世界情勢が不安定な今こそ、人類の平和に貢献する研究を希求すべきです。わが国が抱える人口減少や急速な高齢化問題は待ったなしですし、世界に目を向ければ地球規模の環境変動、貧困問題や災害、絶えることのない紛争など、社会は脅威に満ちています。これらに対して本学はいくつかの答えを用意してきました。例えば、今日のようにグローバル化した世界においては、エボラや新型インフルエンザなど、次々と新たな脅威となる病原体が出現していますが、本学はすでに研究・臨床に着手しています。さらに、被爆都市として核兵器廃絶への取り組みや、海洋未来を見据えた専門性の高い研究がすでに始まっています。この秋には最新設備を備えた新しい実習船「長崎丸」も完成し、実習や研究の幅が広がります。多様性を強みとしながら、異分野融合や新しい挑戦から生まれる質の高い研究にも期待しています。

小川／昨年からスタートした熱帯医学・グローバルヘルス研究科などはその好例で、各地から熱い視線が注がれていますね。

学長／はい、同研究科には、英国のロンドン大学からエボラウイルスを世界で初めて発見したピーター・ピオット博士をはじめとする世界的権威の教授陣が講義を行っています。研究業績を上げるためには、教員が研究に集中する環境を整備し、国際的な連携を強討しています。

小川／長崎経済研究所もいくつかの国際友好協会を持っていますが、学術的な国際交流や研究者の行き来が活性化することは、知の拠点としての長崎の発展にも大いに寄与します。

熱帯医学研究者の熱い視線を浴びるグローバルヘルス分野の研究

2015年に坂本キャンパスに完成したグローバルヘルス総合研究棟は、熱帯医学、国際保健、ヘルスイノベーションをキーワードとするグローバルヘルス領域の教育・研究拠点です。教員も学生も多国籍で、ここから世界で活躍する人材が巣立っていきます。

化することが肝要です。日本はもとより、世界中の研究者に注目され、「長崎だからこそ、この研究ができる」と優秀な研究者が集まる仕組みづくりは重要課題です。そのために、研究をマネジメントしながら支援する人材であるURA[※2]を部局に配置することも検

地域情報の発信源となる大学

小川／第三の基本方針である「長崎の未来を創る大学」は、地域における長崎大学の存在意義にも関わってきそうです。

学長／本学の基盤の安定において、地域貢献は欠かせません。地域経済や、工業・水産などの産業界、地方公共団体などへの関与を通じて長崎を活性化させることは、本学の使命の一つです。ネットワークの要としての役割を果たすとともに情報の発信源となるには、これまで行ってきた研究シーズのデータ化をさらに進めなければいけません。産学官で連携しながら地域経済情報などの収集を強化し、教育や研究の現場に役立てる汎用・活用しやすいシステム作りを目指します。

小川／大学発ベンチャーが活況ですが、中にはキャンパスの中に社屋を設け、一部上場を果たしている例もあります。私自身は、大学での学びは学生時代にはピンと来ず、社会に出てから初めて役立ったという実感があります。学生にとって、ビジネスに少しでも触れる場があれば、学びと社会が直結していることを早いタイミングで知ることができるでしょう。

学長／そうですね。そういう意味でも学生が会社で学ぶクラークシップ（参加型実習）を活性化させ、早く現場の雰囲気を味わって

※2／URA:University Research Administratorの略。大学の研究を推進するために、研究戦略の立案から環境整備、学外に向けた広報まで幅広く研究をサポートする職種。

もらい、社会で何が役に立つかを知ってもらいたいですね。何しろ本学には学生九千人、留学生を合わせれば約一万人が在籍しており、彼らのパワーは計り知れません。ボランティア活動も盛んですが、これを実習として評価し、単位に結び付けることも考えています。そうすることで、例えば工学部で学ぶ学生が地域の街づくりや整備計画について提言したり、医学部で学ぶ学生が高齢化や介護の課題にアイデアを生かしたりといった、学びに連動した動きをもっと活性化できるのではないでしょうか。

小川／実現すれば若い世代ならではの発想や新鮮なアイデアが期待できそうですね。

学長／働く場としての大学の改革についても考えています。本学が将来にわたって存続し、強固な基盤を築いていくためには、国だけに頼らない複数の基盤を持つ方が有利なことは自明です。次の一手を打ちながら外部の評価を得るために、教職員が持つ能力を最大限に引き出すこと。そのためには、チームワークを考慮した仕事の進め方、多様性を認めた手法など、

本学の強みは他大学より抜きん出る潜在能力

Shigeru KOHNO

長崎大学長
河野　茂
こうのしげる
1974年長崎大学医学部卒業後、長崎大学助手、ニューメキシコ大学医学部研究講師を経て1996年長崎大学医学部教授となる。2006年同大学医学部長、2009年同大学理事（病院担当）・病院長を歴任し、2014年同大学理事（総務担当）・副学長（計画評価担当）に就任。2017年10月より現職。

やりがいのある職場にする仕組みが必要です。少し時間はかかるかもしれませんが、将来に向けて新規の教員から年棒制を導入することも検討中です。

実績の一つ、大学病院の改革

小川／ところで、河野学長はこれまでどのような道を歩んでこられたのでしょう。ご出身は長崎県と伺いました。

学長／東彼杵郡波佐見町の生まれです。祖父は長崎大学医学部の前身である長崎医学専門学校出身で、医師として病院を開業していました。しかし、父は職業軍人でしたから、病院は閉めており、長男として生まれた私が河野医院の再興の夢を託されていました。決して裕福な家庭ではなく、天才でもありませんでしたから、努力を重ねて佐世保南高校から長崎大学医学部になんとか進学しました。学生時代はテニスに夢中になりました。私はスポーツが大好きです。卒業して医師になったら、波佐見に戻って開業するつもりでいましたが、先輩に誘われて結局、大学病院での研究の道を選びました。

小川／進路を変更したわけですね。ずいぶん悩まれたのではないですか？

学長／それは悩みましたよ。しかし先輩の「日本人だけでなく世界のいろいろな人と出会い、さまざまな経験をすることは、人生にとって決してマイナスにはならない。長崎大学にはそれがある。これも一つのチャンスだよ」という一言で背中を押されたのですが、結果的にはそれが転機となりました。その後多くの挫折を味わうなど紆余曲折を経ながらも、真菌症、つまりカビの研究に出会いました。診断法や治療法も確立されていなかったので、診断法の研究からのスタートでしたが、タイミング良く内科領域で注目されました。

小川／その後、医学部長も経験され、医学部全体のスリム化などで実績を挙げています。しかし、河野学長といえば長崎大学病院の院長として組織改革や経営基盤の強化に辣腕を振るったことが記憶に新しいところです。

学長／そうですね。病院経営は私のキャラクターにぴったり合いました。

小川／キャラクターといいますと…？

学長／実は私は、波佐見では子どもの頃から母が経営する薬局の手伝いをさせられていたんですよ。自転車で町内を回って集金したり、荷物を運んだりお客さんや従業員に愛想笑いしたり…。嫌なこともありましたが、意外に面白かったですね。

小川／それはまた、すごい経験です。

学長／ええ、ですから経営というのは、お金だけでなく物や人を動かすものだという感覚を子どもの頃から養った、筋金入りの経営者ですかね（笑）。珍しいタイプの医師でしょう？

小川／「三つ子の魂百まで」とはこのことですね。しかし一言で病院の組織改革といっても、簡単ではなかったのではありませんか？

学長／まずは病院で働く皆さんの不満をヒアリングしました。まとめ役が現場の声をうまく集め、改革にまい進してくれました。

小川／まさに「答えは現場にある」の実例で、改革には現場の支持が必須なのですね。リーダー論としても興味深いお話です。

学長／私自身は、深く考えるよりも体が動く性質です。検討して戦略を練るのは周りのブレーンがやってくれます。気が付くと周囲にそういう素晴らしいブレーンがいてくれる、運がいいのです。皆さんの尽力で、患者さんにとって最適な治療を受けられる、職員が働きやすい病院への転換ができたという自負があります。

挑戦し続ければ道は開ける

小川／そのような経緯を経て、このたびいよいよ学長として長崎大学全体のかじ取りを任されたわけですね。病院経営と大学運営では違う点もありそうです。

学長／大学病院と比べて、大学全体となればステークホルダー（利害関係者）の要素が格段に多いですね。学生と教職員に加えて、地域社会、産業界、地方公共団体と、さまざまな関係者がおられてそれぞれの考え方があります。実に多様性に富んでおり難易度も上がる中で、方向性をしっかり指し示していく大きな責任が学長にはあります。

しかし私自身は、これまでの経験を踏まえ、どんなに困難な状況でも必ず道はあると信じています。挑戦し続けた人生から、これは断言できます。道は必ず開ける。

これからも道しるべを選びつつ、歩み続ける所存です。一歩踏み出せば、必ず次の一歩を踏み出すことに全力を尽くす。本学は多くの人的資源に恵まれており、他の国立大学や社会組織との競争で抜きんでる潜在能力があります。それらを発揮するためには、常識にとらわれないブレークスルーが必要です。ひとたび道を見つけて歩き出しさえすれば、追い風が吹くようなスケールメリットの獲得までの間を必死に進めばいい。そして、これから長崎大学にやってくる若人たちが、一緒に未来へと進んでくれる。私はそのように考えています。

小川／おっしゃるとおりです。学長のお言葉の中に、これからの長崎大学がさらに輝くヒントがたくさん含まれていると感じました。明るい未来を見据えて一歩一歩足を進める中で、私ども地元企業も今後とも大いに協力させていただきます。本日はありがとうございました。

学長／こちらこそ、ありがとうございました。今日お話したことの実現は大学だけの努力では到底不可能です。地域経済の力をお借りしながら共に歩みを進めていきたいと考えています。今後ともよろしくお願いいたします。

Challenge of Nagasaki University